FGC NEWS No.3

September 2013

FGC ～Foundation for Global Children～

一般財団法人 世界こども財団

◆ **東日本大震災支援活動**

医療支援班・教育環境支援班　～民のネットワーク結集へ！～」

◆ **海外支援**

継続的なミャンマー支援へ　～人材育成・白内障治療・救急車・無線機器～

ブータン留学生～富士山初登頂～

東日本大震災支援活動報告　医療支援班

本気で動く個人のネットワークが、本当に必要な支援を可能にする

世界こども財団（FGC）医療支援班　上　昌広
（東京大学医科学研究所 先端医療社会コミュニケーション社会連携研究部門特任教授）

私は内科医です。ご縁があり、東日本大震災以降、福島の医療支援を続けています。具体的には、地域住民の健康診断、内部被曝検査、最近では多数の若い医師たちが常勤医として、福島で勤務することを手伝っています。

実は、私たちが、このような活動を続けていられるのは、世界こども財団のお力添えがあってのことです。土屋了介理事長、宮澤保夫先生をはじめ、関係者の方々に感謝申し上げます。

教育環境支援班の方々には、本当に御世話になりました。例えば、震災直後に南相馬に入った我々のチームの宿舎や食事の手配、移動手段のサポートなど、一切合切をやっていただきました。

殆どの住民が避難し、真っ暗闇の南相馬市で、唯一営業を続けていた旅館を借り切り、星槎グループがどこからともなく食料を調達し、食事を準備していただいたことは、今となっては、いい思い出です。

また、2011 年 5 月末、全村避難を控えた飯舘村を手始めに、相馬市玉野地区、川内村などで、住民の健診を行いました。相馬市については、今年の 7 月に震災三年目の健診を行ったばかりです。

一連の健診では、会場の設営や受診者への案内を引き受けて頂いたのは、教育環境支援班の方々でした。市役所の方々は勿論、全国から集まった医師たちにとっても、どれだけ心強かったかはわかりません。知人の医師は、「彼らの真摯な姿をみて、価値観が変わった」というくらいです。

さらに、教育環境支援班の方々は、相馬市の「さくらビル」に活動の拠点を作り、支援に入る方々に宿舎や食事を提供頂いています。この施設は「星槎寮」と呼ばれ、朝日新聞の『プロメテウスの罠』でも大きく取り上げられました。

震災直後、支援者にとっての悩みは、宿舎が確保出来ないことでした。私たちは星槎グループが運営する星槎寮のお陰で、このような問題を回避することができました。

「星槎寮」に吸い寄せられるように、多くの方々が繰り返し訪れるようになりました。例えば、地元　相馬高校の教師である高村泰広先生（現在は隣町の新地高校に異動）も、その一人です。凄まじい行動力を有する教育者です。早速、友人の教師や教え子達を連れてきてくれました。その中に松村茂郎・相馬高校教諭や、当時大学生だった藤原真哉さんがいます。私たちも、星槎寮で彼らと知り合いました。

松村先生は相馬高校の教育レベルの向上に大きく貢献し、教え子が 13 年ぶりに東京大学に現役で合格しました。また、藤原さんは大学を卒業後、川内村の音楽教師として、被災地の子どもの教育に従事しています。私たちも、彼らの活動を応援し、このような活動を通じ、多くを学ぶことが出来ました。

人材こそ、地域の財産です。被災地の復興に関しては、教育から始まると言っても過言ではありません。これからも教育環境支援班と連携をとりながら活動を続けてまいります。

プロメテウスの罠
「学研パブリッシング発行」

東日本大震災支援活動　総集計【2011 年 5 月～2013 年 7 月】

《医療支援班・教育環境支援班が実施した放射線説明会・健康診断》延べ人数

対　象	一般市民	教職員対象説明会	中学生	医療関係者	合　計	健康診断（仮設住宅等住民等）
相馬市	2,494	240	約 200		2,934	2,403
南相馬市	186	113		60	359	
川内村	78				78	135
郡山市	25				25	
飯舘村						424
総　合　計	2,783	353	約 200	60	3,396	2,962

こどもを支える教員のネットワークづくりのために

世界こども財団（FGC）教育環境支援班　吉田　克彦
（相馬フォロアーチーム・星槎大学非常勤講師）

教育環境支援班では、主に福島県の相双地区（相馬市・南相馬市・新地町）の小中学校及び、高校へ週１～２回スクールカウンセラー（SC）が訪問し、カウンセリングや学習支援を行っております。
今回は養護教諭サポート事業について紹介します。

養護教諭とは保健室の先生です。養護教諭の仕事は、こども達の健康観察や怪我や病気の処置だけではありません。食育や性教育をはじめとした健康教育に関する啓発活動、教室の明るさを確保する照度検査、空気や水質の環境管理も行わなければなりません。特に、福島第一原発事故以来、放射線教育の強化や放射線に関する健康管理・検査の推進も重要な業務です。このように、被災地のこども達の心身の健康を維持するためには養護教諭の力が欠かせません。しかし、相双地区は避難による児童生徒数減少で、養護教諭は学校に一人しか配置されていないため、職場で先輩から教わることができません。新人であってもベテランと同じ仕事をしなければなりません。高い専門性が求められ、一人職であり、こどもの健康安全に直結する存在です。養護教諭の方をサポートすることは、養護教諭自身の燃え尽き防止と、被災地のこども達の心身の健康を増進するためには欠かせないことです。

FGC では、養護教諭の専門性をさらに高め、養護教諭同士の連携・連帯を深めてもらうことを目的として勉強会を主催しています。具体的には、個別対応と研修会・事例検討会の開催です。個別対応では養護教諭が対応に苦慮する場面で、現地に常駐している SC が必要に応じて支援・助言・情報提供などを行っています。事例検討会は二週間に一度、平日の夜に７～８名の先生方が集まり、22 時過ぎまで熱心に学び、実際に困っている事例を紹介し、養護教諭の方々に FGC の SC が加わり議論しています。

時には、特定の事例を設定せず、とりとめのない日常業務についての話しをする中で、それぞれの学校の様子や地域の状況・他校の先生方の仕事ぶりを知ることができる場ともなっています。この夏には、発達障害やカウンセリング技法の研修会も行いました。このように養護教諭の方々の緊密なネットワークを形成することによって、地域のこども達の健全な育成を面で支える一助になればと考えております。

＊東日本大震災支援活動　総集計　教育環境支援班【2011 年 5 月～2013 年 7 月】延べ人数

		カウンセリング			※コンサルテーション	行動観察	情報交換	特別支援・心理教育研修	授業サポート
		生徒	教員	保護者					
相馬フォロアーチームとして	中村第二中学校	55	93	22	15	14	33		
	磯辺中学校	212	99	1	94	161	81		31クラス
	磯辺小学校	187	58	1	4	30	2	5回	16クラス
	日立木小学校	42	26	4	33	131	84		
	玉野小学校	1	1	0	0	0	0		
	山上小学校	1	2	2	4	50	44		
	新地小学校	3	0	1	4	0	3		
南相馬市緊急カウンセラー派遣事業	原町第三中学校	92	3	11	3	11	23		
	小高中学校	118	8	7	41	108	72	1回	
	小高小学校	78	27	11	47	85	66		
	鳩原･金房･福浦小	42	37	4	70	113	71		
	真野小学校	5	2	4	26	49	25		
	合計	836	356	68	341	752	504	6回	47クラス

※コンサルテーション…教育的助言

福島のこどもたちの笑顔のために…

リトバルスキー氏 in 相馬サッカー教室

7月6日(土)福島県相馬市で、リトバルスキー氏(以下リティ）による２度目のサッカー教室が開催されました。今回は小学校４～６年生の約 70 名の参加です。リティ氏の綿密なトレーニングプランのもと、サッカー教室が始まると、リティ氏の気さくな人柄にこども達はすぐに打ち解け、ウォーミングアップを楽しそうに開始しました。リティ氏が実際に、ボールを上に高く上げ、そのボールを足の甲で吸収するトラップの見本をした時には、こども達から「おぉ～」と歓声が上がりました。**2時間近くのトレーニングは終始笑顔が絶えませんでした。こども達からは「次はいつ？」と言う声も聞かれました。**

リティと集合写真

東日本大震災にかかわるサッカー活動支援 in 星槎湘南大磯キャンパス

8 月 10 日、11 日福島県相双地区の小学校高学年のトレセンチーム（小学生 37 名、大人 21 名）を招待し、茅ヶ崎トレセン・星槎 OSA ジュニアとの交流戦、サッカースクールを実施しました。ボランティア（東京大学サッカー部９名)。

【参加者の声】相双トレセン委員長村上氏「今回の神奈川遠征で、選手をはじめ指導者、保護者ともいい経験になりました。選手達は神奈川チームとの交流試合、サッカースクール等大変喜んでおりました。また夜の東大生による勉強会では、教え方が分かりやすいと好評でした。保護者対象の“こども達のために食事バランスを考える講義”では、真剣に質問している保護者の姿が印象的でした。･･･ 中略 ･･･ いつまでも、被災地区、被災者だと甘えてばかりもいられません。これからも相双地区と神奈川県との交流を深めていけたらと思っております。」保護者 O.M さんの声「神奈川遠征、息子と共に２度も参加させて頂き有り難うございました。今回も交流試合やサッカー教室、東大生との勉強会等、様々な内容で 息子にとっても忘れられない思い出になったと思います。」小学校５年生選手 S．S君の声「僕は、トレセンに選ばれて初めての遠征でした。･･･ 中略 ･･･2日目のサッカー教室はとても勉強になりました。来年も必ずトレセンに合格できるように、この神奈川遠征で学んだことを生かし、実践しながら頑張りたいと思います。**僕の夢は、プロのサッカー選手になることです。夢に向かって日々努力中です。**２日間お世話をしてくれた皆さん、ありがとうございました。」

相馬市　健康診断・健康相談

（2013 年 7 月 13日 ～19日 ）

相馬市では、震災以降、被災された方々を対象とした健康診断が、2011 年より毎年 1 回の割合で実施されています。今回は 585 名の方が受診しました。

この健診の特徴は、九州大学、福岡豊栄会病院の皆様によるロコモティブシンドローム（生活不活発病）の健診がある事です。仮設住宅の人々のあいだでは、このロコモティブシンドローム及びメタボリックシンドローム（生活習慣病）が未だ改善されぬ問題として残されています。しかし、相馬市では今年度内に 9 ヶ所の復興住宅が完成し、9 割以上が次に住む家の目途がつきました。

将来に対する安心度が増したのか、受診した方々が昨年度より笑顔が増えてきたように思います。

骨密度を測る星槎スタッフ

2013 自然から学ぶ夏の教室

2013 年 8 月、東北大学大学院環境科学研究科教授 石田秀輝先生による、2013 自然から学ぶ夏の教室「ネイチャーテクノロジーが未来を創る～大自然から学ぶ世界最新の生活技術～」を開催しました。石田先生は、TBS テレビ『夢の扉』でも紹介され、トンボの羽の形状から風力 20cm で回りだす風力発電、カタツムリの殻の形状から汚れないタイル等を考案されました。**世界こども財団では、エネルギーの問題や生活のあり方等様々な問題に直面する今、科学のあり方を見直し、人間の手が届くエネルギーを使う暮らしや生活を、広く考えて頂こうと企画しました。**参加者は 10 代～80 歳の方まで、14 名の方が参加されました。

2 日間の内容は講義だけではなく、「自然散策」や「自然界のすごさを体験するための実験・工作」、そして「参加者方の考える幸せな未来についての話し合」と、2 日間盛りだくさんの内容でした。

【参加された方の感想】「日頃あまり考えないテーマで、発見も多かった。ワークショップには、最初戸惑いもあったが楽しかった」「自然の偉大さをもっと知りたかったので、今回の石田先生の話は大変面白くとても参考になりました。特にこれからの日本をどうして行くのか、というヒントを多くいただいたように思います」

北の大地　帯広・芦別コース

（2013 年 7 月 27日 ～8 月 6 日 ）

被災地のこども達を北海道に迎えるのは 3 回目。川遊び、パークゴルフ、豚丼調理、地域のお祭り参加など、北海道の自然の中で、仲間との関わりを通して体験的に学習してもらいました。星槎の高校生もスタッフとして大活躍！年齢、性別、生まれ育った場所など関係なく、すぐに打ち解けていました。こども達の元気いっぱいの笑顔、好奇心に輝くキラキラした瞳が印象的でした。

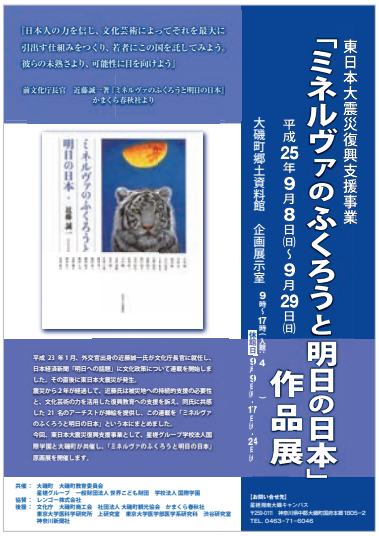
彼ら彼女らの未来が、山ほどの幸せに包まれることを願ってやみません。

気球に乗る福島のこども達

美味しい豚丼調理

Japan

東北復興支援
「ミネルヴァのふくろうと明日の日本」作品展が全国へ



文化芸術による東北復興支援を目的とした「ミネルヴァのふくろうと明日の日本」作品展を全国で開催することとなりました。
外交官出身の近藤誠一氏が文化庁長官に就任し、平成 23 年 1 月、日本経済新聞「明日への話題」に文化政策について連載を開始しました。その直後に東日本大震災が発生。
震災から 2 年が経過して、近藤氏は被災地への持続的支援の必要性と、文化芸術の力を活用した復興教育への支援を訴え、同氏に共感した 21 名のアーチストが挿絵を提供し、この連載を「ミネルヴァのふくろうと明日の日本」という本にまとめました。星槎グループ学校法人国際学園は近藤氏と画家 21 名の想いに賛同し、21 点の作品を購入しました。
近藤氏やその思いに賛同する人々により、この本や絵画の収益は被災地で活動する 3 団体への活動資金として寄贈されました。

大磯郷土資料館展示風景

○サンタ・プロジェクト【代表：福原 義春氏（資生堂名誉会長）】
○東北へ「おっぱいいっぱいプロジェクト」【代表：阿刀田 高氏（作家）】
○大震災出版復興基金【代表：相賀 昌宏氏（小学館社長）】

7 月 19 日、大磯郷土資料館で行われた開催発表会では、前文化庁長官 近藤誠一氏から「“有る” ものだけではなく、文化のように “見えないもの” に価値を見いだすのが日本人の伝統的思想。作品を通じて思想の普遍性を伝えたい」とお話がありました。
一人でも多くの方にこの作品をご覧いただき、近藤誠一氏の文化芸術の力に対する想いや画家の方々が作品に込めた想いを、直に作品から感じ取って頂きたいと考えております。

前文化庁長官　近藤誠一

今後、世界こども財団では、この作品展を全国で展開します。
又、段ボール・包装のリーディングカンパニー レンゴー株式会社様から寄付された組立て式募金箱の創作活動を通じて、文化芸術を軸にこども達も参加できる支援活動も継続して参ります。

「ミネルヴァのふくろうと明日の日本」全国 作品展日程

第 1 弾　日　時：平成 25 年 9 月 8 日（日）～ 9 月 29 日（日）
　　会　場：大磯町郷土資料館　企画展示室
　　神奈川県中郡大磯町西小磯 446 － 1（県立大磯城山公園）

第 2 弾　日　時：平成 25 年 10 月 22 日（火）～ 10 月 27 日（日）
　　会　場：大丸藤井セントラル 7 階スカイホール
　　北海道札幌市中央区南 1 条西 3 丁目 2

ミャンマーの白内障：失明防止のための持続可能なプロジェクト

JIGH 理事長　渋谷　健司

白内障は、日本でも高齢者には多い目の病気ですが、世界全体の高齢化と生活習慣病の増大に伴って、特に発展途上国で急増しています。一度罹患すると不可逆性の経過をたどるために放置すれば失明に至る疾患です。しかし、適切な治療（眼内レンズ挿入手術）を施せば劇的に視力を改善することができます。

ミャンマーの失明率（8% 以上）は世界でも最も高く、うち約 70% が白内障によるものとされています。特徴的なことは、日本とは違い、比較的若い年齢で発症することです。生産年齢人口の罹患率が高いことは、社会・経済的にも大きな負担となっています。ミャンマー政府も白内障に対する対策は最優先課題としています。しかし、同国では手術が可能な医師や施設の不足、白内障診療に係る医療機器不足等のために、約 60 万症例の白内障患者が手術を受けることができていません。

ミャンマー政府からの要請を受けて、今回、星槎・世界こども財団は、ロート製薬等と協力してミャンマーにおける白内障治療のためのプロジェクトを開始しました。医療機材を供与しただけでは、現地に白内障治療の技術は根付きません。また、全てを無償で供与することは事業の継続性に大きな課題を投げかけます。そこで、今回は、機材の供与と同時に、日本人医師による白内障手術の指導、眼科医及び医療機器メンテナンス人材の育成、日本企業との連携による白内障レンズの現地での展開を軸に、事業としての継続性を担保しながらも、白内障治療にアクセスが難しい貧困層にできるだけ多くの治療を施したいという欲張りなプロジェクトです。

（写真 1）

プロジェクトは、今年 5 月に世界子ども財団が 10 台の持ち運び可能な白内障手術のための機器をミャンマーに寄贈したことから本格的に始動しました。そして、8 月 11 日から 16 日まで保健省やヤンゴン眼科病院（写真 1）を訪問し、今後の計画を立てると同時に日本人医師による現地での手術指導が可能かどうかを調べてきました。手術の指導のために白羽の矢がたったのは服部匡志医師です。服部先生は、ベトナム等で 1 万人以上の患者に無料で手術を施し多くの人々を失明から救っています。彼は、ミャンマーを含むアジア地域における白内障を含む眼科疾患や現地における診療制度にも精通しており、今回の技術転移には無くてはならない存在です。服部先生は、次世代レンズ挿入が可能な日本製の中古の機材を自ら持参して、ヤンゴン眼科病院に寄贈しました。既知の間柄である主任教授をはじめスタッフからの服部先生に対する信頼が厚く、早速何例かの難しい症例の手術を実施することになりました。

（写真 2）

一人目は遠方のシャン州から 2 日かけて来た糖尿病性網膜症で失明直前のおばあさんですが、幸いにも服部先生の手術で回復しました（写真 2）。難しい網膜の症例も現地の医師にできるだけ手術を経験させながらうまくフォローする服部先生の素晴らしさは、隣で白内障の手術キャンペーンに来ていた韓国のチームや欧米の医師も見学に来るほどでした。韓国チームから不足している手術資材も快く頂くことができ、手術の終了時には拍手が起こりました。ちょうど 8 月 15 日の終戦記念日にミャンマーの手術室で日本と韓国の医師が仲良く働くができました（写真 3）。

（写真 3）

今回のヤンゴン眼科病院での活動は、ミャンマーの国営放送（MRTV）でも大きく紹介されました。保健医療は国境に関わり無く、また、政治信条に関係なく受け入れられるものです。ミャンマーでの白内障治療を持続可能なプロジェクトにすべく、さらに実施調査を 12 月に行う予定です。

遠隔地医療システムの構築を目指して

ミャンマーの農村部では、地域に医療施設がなかったり、都市部の病院に行く交通手段がないために十分な治療を受けられない等の問題を抱えています。この医療の地域格差に対応するために、FGC はミャンマー保健省と連携し、移動式診療車を導入することにより、遠隔地での医療システム整備を行っています。

FGC は、日本外交協会を通じて 2 台の中古救急車を入手しました。これらを整備し、救急時の連絡手段として無線機器を設置し、ミャンマーに搬送します。無線システムを導入することは、携帯電話等の通信手段が限られている遠隔地において、人々の命を救う重要な役割を果たします。

この計画を順調に推し進め、近い将来ミャンマー全土で遠隔地医療システムが機能し、多くの人々が健康を保てる環境を構築する事が FGC のミッションです。さらに、医療従事者の育成や出産前後の感染症による母子死亡率の低下など、ミャンマーの健康、衛生環境向上のために活動を拡げていきます。

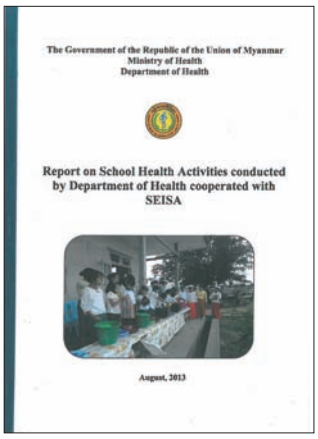
FGC からミャンマーに贈る救急車

学校に手洗い場を設置

FGC の支援により、ミャンマー保健省は学校における健康向上プログラム（スクール・ヘルス・プログラム）を開始しました。このプログラムは、こどもの頃から健康・衛生に関する知識を持ち、健康的な生活習慣を身に付けさせることにより、学校全体の健康、衛生環境を向上させることを目的としています。また、こどもたちの活動が保護者や周囲の大人たちにも影響を与えることにより、家族やコミュニティーの健康も向上させることを目指しています。

ミャンマー保健省は 7 月までに、2 つの学校に手洗い場を設置しました。また、5 つの学校に石鹸、歯磨き、タオル等を提供し、手洗いや歯磨きの実践指導、衛生管理教育を行いました。

今回の活動はモニタリングし、その成果を評価することになっています。国の将来を担うこどもや若者たちの健康を守ることでミャンマーの発展に貢献できるよう、スクール・ヘルス・プログラムの活動を継続していきます。



The Government of the Republic of the Union of Myanmar
Ministry of Health
Department of Health

Report on School Health Activities conducted by Department of Health cooperated with SEISA

August, 2013

ミャンマー保健省のスクール
ヘルスプログラム報告書

Myanmar

科学技術分野での人材育成支援

ミャンマーの社会発展のために、科学技術分野での人材育成は不可欠です。FGC は、ミャンマー科学技術省の要請により、新たな高等技術専門学校を設置し、科学技術立国として国を支える人材育成の支援を行います。その一環として、５月に宮澤保夫 FGC 専務理事が PC50 台を同省に寄贈し、Ko Ko Oo 科学技術大臣からは FGC の支援に対する感謝と共に、今後の更なる協力体制強化への期待が述べられました。

宮澤専務理事の８月の同省再訪時には、高等技術専門学校を設置に関するより具体的な協議が行われました。**また、日本ミャンマー協会との連携により、工業学校の高校生を日本の工業高校に短期留学として受け入れること、ヤンゴン工科大学の学生を招聘し、日本の企業でコンピュータ事業やビジネスマネジメント研修を実施すること等がミャンマー科学技術省との間で合意されました。**これらの事業を通じて、FGC はミャンマーの人材育成の仕組み作りに貢献していきます

ミャンマー科学技術大臣とのミーティング

通信情報技術省に無線機器を寄贈

通信情報技術大臣に無線機器贈呈

FGC は、不法電波や治安の取り締まりを強化するシステム作りのために、目に見えない電波を視覚的に表示する機能を備えた電波監視に有用な高性能受信機や、中・長距離及び短距離の通信に適したトランシーバーと付属アンテナ等を寄贈しました。**これらの無線機は、ミャンマーの安全保障を確保する手段の一部を担い、また非常災害時の通信手段の要として役立つことでしょう。**

Cambodia

宮澤専務理事にカンボジア政府から叙勲

クメール勲章銅賞

宮澤専務理事の長年に亘るカンボジアへの支援に対し、カンボジア政府からクメール勲章銅賞が贈られました。**昨年末移転した障がい者や孤児たちへの自立支援のための職業訓練センター（Phnom Penh Thmay Vocational Training Center）の設備や環境改善への支援等、主に教育と医療分野での支援活動を行ってきました。**これらの活動に対して、政府から正式に認められたことは大きな励みとなります。今後もカンボジアの子どもたちや若い世代の自立支援のため、長期的な活動を行ってまいります。

宮澤専務理事

ブータン留学生が富士山登山に挑戦！

富士山頂にてご来光

8月27日アシケサン－宮澤星槎奨学生のキンザン・ゲルチェンとペマ・カンドゥ・ワンチュクが日本で最も挑戦したかったことの一つである、富士山に1泊2日で登頂しました。富士山登山は、その姿を大磯からいつも美しく見せてくれていることから、ずっと二人とも楽しみにしていました。

ブータンでは、2泊3日のトレッキングに行っていたという二人だけあって、さすが山登りは得意のもの。登山家のように、スイスイと岩場を登っていました。山頂では、他の登山客と一緒に御来光を待ち、その日の出の美しさに感動していました。二人とも「また登りたい」「御来光を見て、日本人が富士山に登る理由が分かった」と言っていました。今回の登山は天候に恵まれ、山頂からの眺めはもちろんのこと、登る時、下山する時にも、山中湖や河口湖の景色や夜景を見ることができました。二人は、星槎での留学を通して、場所文化の大切さを学んできています。

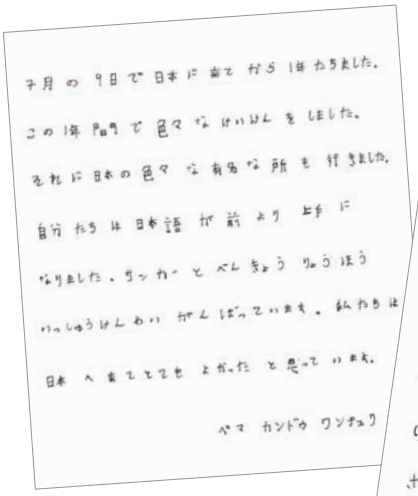
この登山を通じても、世界文化遺産となった富士山に対する日本人の思いなど、場所文化を学んでくました。帰国後には、富士山登山の経験を感動と共にブータンの人々に伝えてくれると期待しています。

火口をバックに

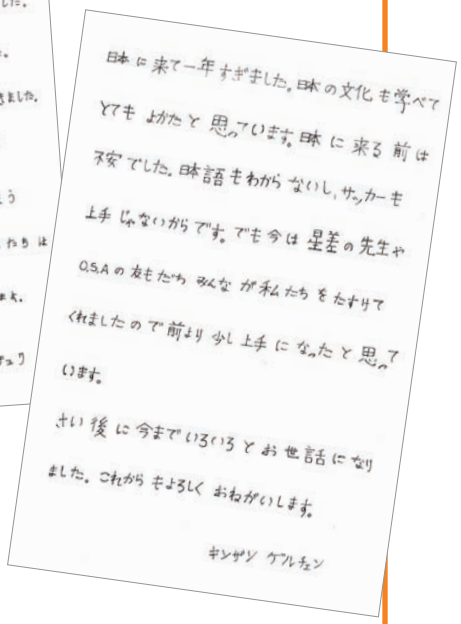
日本での留学生活で多くのことを経験し、学びました。

キンザンとペマが来日してから1年が過ぎました。異なる文化での生活に慣れるでは困難もありましたが、様々な人と関わり、色々な新しいことを経験する中で、大きく成長しました。

特に日本語の上達は目覚ましく、ペマはおしゃべりが大好きで、日本語で何でも言いたいことを伝えられるようになりました。キンザンは漢字が得意で、まじめにこつこつ勉強し、作文では習っていない漢字も「漢字でどう書くのですか」と必ず質問してきます。



7月の9日で日本に来てから1年たちました。
この1年間で色々なけいけんをしました。
それに日本の色々な有名な所も行きました。
自分たちは日本語が前より上手になりました。サッカーとべんきょうりょうほうがんばっています。私たちは日本へきてとてもよかったと思っています。
ペマ カンドゥ ワンチュク



日本に来て一年すぎました。日本の文化も学べてとてもよかったと思っています。日本に来る前は不安でした。日本語もわからないし、サッカーも上手じゃないからです。でも今は星槎の先生やO.S.Aの友だちみんなが私たちをたすけてくれましたので前より少し上手になったと思っています。
さい後に今までいろいろとお世話になりました。これからもよろしくおねがいします。
キンザン ゲルチェン

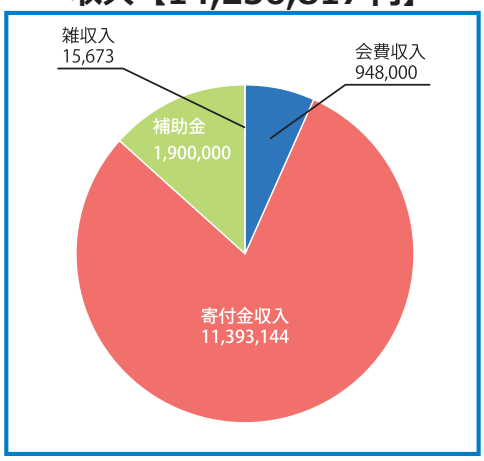
二人の直筆 ▲▶
こんなに上達しました

卒業まであと半年となりましたが、残りの留学生活でさらに多くのことを学んでくれることを期待しています。

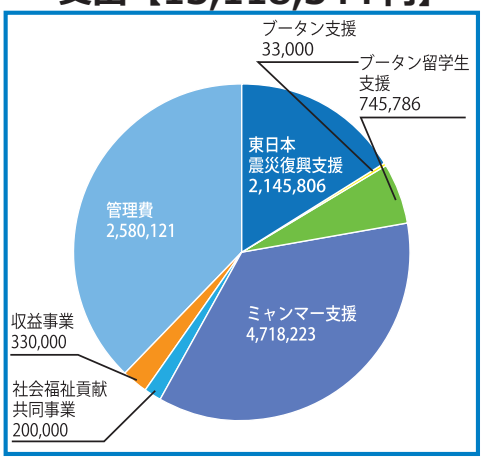
事務局より

事業活動収支中間報告（2013 年 1 月 1 日～ 2013 年 7 月 31 日）【単位：円】

収入【14,256,817 円】



支出【13,118,344 円】



※上記内訳は 2013 年事業活動収支報告書に基づき、算出されたものです。
※この他、外貨で 16,302,45$ のご寄付をいただいております。

一般社団法人日本ミャンマー協会の情報誌「MYANMAR FOCUS」４月号に、世界こども財団の活動が取り上げられました。
５月に宮澤専務理事がミャンマーを訪問した際に、白内障の手術機器を「Sekkupaladi Foundation」に寄贈した贈呈式の様子が写真入りで紹介されています。また同月、来日されたミャンマーの U Myat Hein 通信大臣との懇親会にも宮澤専務理事が出席し、集合写真が掲載されました。

6 月 12 日、財団の評議員である加藤登紀子さんのコンサートが神奈川県茅ケ崎市民文化会館で開催されました。東日本大震災の復興を支援するチャリティーコンサートです。
地元の NPO など数団体とともに、世界こども財団もチケット販売や当日の運営などに協力しました。コンサートの収益は協力団体に配分され、世界こども財団にも 335,958 円のご寄付をいただきました。
チケットの売上等にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

ご協力いただいている企業・団体様（順不同）2013 月 1 月～ 7 月

●㈱ DOE	●コグメド・ジャパン㈱	●㈱横浜綜合写真	●レンゴー株式会社
●鈴廣かまぼこ㈱	●㈱小田原鈴廣	●㈱トキコ・プランニング	●国際ソロプチミスト二宮
●ダイドードリンコ㈱	●西武商事㈱	●エフヴイセントラル㈱	●コカ・コーラセントラルジャパン㈱
●コカ・コーラ ウエスト㈱	●北海道コカコーラボトリング㈱	●㈲安田コーポレーション	●北海道ベンディング㈱
●北陸富士ベンディング㈱	●北海道キリンビバレッジサービス㈱	●東京キリンビバレッジサービス㈱	●大蔵屋商事㈱
●㈱ベネフレックス	●㈲杉山飲料	●㈱バリューブックス	●シーフォー㈱
●大磯ロータリークラブ	●横浜綜合法律事務所	●湘南健康管理センター	●大和屋商店
●若狭ものづくり美学舎	●夢楽	●かるがもクリニック	●興学社学園
●大磯町グラウンド・ゴルフ協会	● NPO 法人　西濃学園		

その他、個人、企業の皆様から、多大なるご協力いただいておりますがページの都合上割愛させていただきます。申し訳ございません。今後ともご協力賜れれば幸いです。

段ボール・包装のリーディングカンパニー レンゴー株式会社協賛
段ボール募金箱イベント

レンゴー株式会社取締役川本様（右）から
段ボール募金箱の贈呈を受ける
世界こども財団土屋理事長（左）

レンゴー株式会社様のご協力により世界こども財団へ段ボール募金箱を寄贈していただきました。
今回は「ミャンマーの白内障治療サポート」をテーマにこども達がそれぞれの思いを込めて無地の段ボールにデザインを考え、募金活動を展開しています。
こうした活動からこども達が困難の中にある人々を思いやる気持ちを育んでいきたいと考えています。

無地の段ボールに星槎グループの学校に通うこども達が、思いを込めてデザインしました。
この写真以外にも、数多くの作品が寄せられました。

2013 年 9 月発行

一般財団法人　世界こども財団
〒 259 – 0111
神奈川県中郡大磯町国府本郷 1805 – 2（星槎グループ内）
TEL：0463 – 71 – 6046　　FAX：0463 – 60 – 3507

E-mail：fgc@fgc.or.jp
ホームページ：http://www.fgc.or.jp
Facebook：**「世界こども財団」**で検索！

この冊子は「日本郵便」の助成を受け発行しております。